

『ジェイン・エア』とガヴァネス

末 森 恵 子

1. 表象としてのガヴァネス

『ジェイン・エア』『アグネス・グレイ』『虚栄の市』『ねじのひねり』——いずれも有名な19世紀の小説だが、これらに共通するのは、物語の中のガヴァネスの存在である。またこれらの小説だけでなく、他にもガヴァネス小説がこの時代に多数存在していた。このことはガヴァネスの存在が社会においていかに大きかったかを示している。ガヴァネスという言葉自体が使われなくなった現在、ガヴァネス小説を理解する為にはやはりその背景について詳細に調べておく必要がある。本論では『ジェイン・エア』を取り扱い、一つのガヴァネス小説の例について検討してみたいと思う。

ガヴァネス小説とはいっても、『ジェイン・エア』という作品の主題はもちろんガヴァネスの職業についてはない。ジェインがガヴァネスの立場を問題視することや、仕事にまつわる苦悩を経験していることなどは特に強調されてはいないのである。しかしガヴァネスは単に物語の展開上用いられる存在に留まるには、あまりに深遠な意義を持っている。ガヴァネスが描き出すのは、その時代が抱える、そしてその時代を反映する、非常に複雑な問題なのである。ガヴァネスの問題には物理的なものと精神的なもの両方の側面があったようだ。J.P.ブラウン『十九世紀イギリスの小説と社会事情』にガヴァネスの物理的問題について簡潔にまとめられているので、まずはそれを紹介しよう。

多くの家庭において女家庭教師は「命つなぎの」賃金と、不特定の時間と、結婚による逃げ道以外には前途に望みがないのとて、女中の身分と大差が

なかった。にもかかわらずほかに職業選択の道がなかったために、女家庭教師の失業者が続出した。一八六九年には二万四千人もの女が「失業女家庭教師の家」に收容され、それをさらに上回る人数が門前払いをくわされた。(107)

ちなみにそのように大量の失業者が出た原因はガヴァネス候補となる中産階級未婚女性の著しい増加にあり、それもまた社会問題となった。このようなガヴァネスの窮状や雇用問題が『ジェイン・エア』の中で明確に提起されているとはいえない¹が、そこにはシャーロット・ブロンテが彼女自らの経験から得たと思われる、ガヴァネスという職業についてのリアリティのある描写や細かな心理が確かに描かれており、我々に訴えるのである。この章では、『ジェイン・エア』の作品中に出てくるガヴァネスについての記述を当時の時代背景と関連させながら考察していこうと思う。

まずは中産階級の一女性がガヴァネスの職に至る背景から取り上げたい。だがジェインがそれまで勤めていた教師の職を離れてガヴァネスの職を求めるといふ過程は全く当然の成り行きとして描かれており、あまりに問題なく進行するので、当時のガヴァネス像をそこから読み取ろうとするには不十分であるように思える。ただガヴァネス以外の選択肢が元々社会に存在しなかったので迷うこともできなかったと考えることはできるのだが。むしろその背景を考察する為には、『ジェイン・エア』の中のもう一つのガヴァネスのケースを取り上げる方が相応しいのではないかと思われる。すなわちメアリー、ダイアナ姉妹のケースである。

メアリー、ダイアナ姉妹がガヴァネスになるに至る事情は、物語の中ではジェインによって女中から聞いた話が簡単に説明されるのみであるが、しかしながらジェインの場合とは異なり、姉妹の経験は明確にガヴァネスの苦難の実情を表している。それに至る経緯を見てみると、当時の中産階級の女性がガヴァネスとして働かねばならなくなった一般的な事情が見られる。

Mr. St. John, when he grew up, would go to college and be a parson; and the girls, as soon as they left school, would seek places as governesses: for they

had told her their father had some years ago lost a great deal of money by a man he had trusted turning bankrupt; and as he was now not rich enough to give them fortunes, they must provide for themselves. (302)

父親の負った負債の犠牲になって生活が苦しくなった中産階級の娘というのが、当時のガヴァネスの例として多数いたのである。姉妹にとっても、ジェインと同じようにガヴァネス以外の選択肢はありうるはずもなかった。というのも当時の中産階級の女性にとって働くことのできる、それも中産階級としての体裁を保ったものである仕事がガヴァネス以外になかったからである。

だがそのようにガヴァネスになる決意をしても、皆が仕事を見つけられるとは限らなかったということは、ガヴァネスの物理的問題として先に挙げた通りである。再びジェインの話に戻ると、ジェインがガヴァネスの職を求め方法として新聞に広告を出すというのは当時の一般的なやり方であった。ただ、やはり広告を出してもそう簡単に職が見つかるわけではなかった。その点、ジェインは幸運だったといえる。彼女は自分が出した求職広告に対して“Is there only one?” (76) と言っていたりするが、求職から一週間で仕事が見つかって、しかも好条件などということはそうあるものではなかったようだ（好条件といってもそれは相対的なもので、ジェインのそれまでの教師の収入の二倍に相当する額ではあったが、世間的に見るとハウスキーパー並みだったということが分かっている（川本 34-35）。さらに環境としては、ガヴァネスとしてやって来たジェインに対するソーンフィールド邸の住人の態度も穏やかで好ましいものであった。フェアファックス夫人に最初に会った日の夜、ジェインはこのような感想を持っている。“I little expected such a reception; I anticipated only coldness and stiffness: this is not like what I have heard of the treatment of governesses; but I must not exult too soon” (84). この場合、ジェインが「聞いていた」方のガヴァネスの待遇が、当時のガヴァネスの姿を表すという意味では正しいものであった。冷淡と窮屈、まさにそれはガヴァネスが見ず知らずの他人の家で一人孤独にかみしめていた思いだったのである。ガヴァネスには他の女中たちと違って仲間がいなか

った。雇い主の家族はガヴァネスをその階級意識から見下しており、さらに召使たちとも立場が異なるせいで、ガヴァネスは家という領域の中で完全に孤立してしまうのである。ジェインはそのような待遇とは違ったと言い、それ以後も特に家の者から冷淡な扱いや窮屈な思いをしたという描写は見られない。しかし、彼女自身が「しかし、あんまり早くから嬉しがってはいけない」と考えているように、だからといってガヴァネスとしてのジェインが非常に恵まれていたと断言してはならない。

自身がガヴァネスとして働いた経験を持つシャーロット・ブロンテが、ガヴァネスという職業の実態を知らないはずがない。ジェインの台詞の節々に、我々はガヴァネスが決して安楽な仕事でなかったことを窺い知ることができるのだ。ジェインは自らのソーンフィールドにおける境遇について“any one who...lived as a solitary dependant in a great house” (173) と表現し、さらにそのようなガヴァネスについて“*It would be easy to find you thousands.*” (173) と言っている。ここから、ジェインも他の多数のガヴァネスと同様の孤独を味わっていたことが判明する。やはりいくら条件が良くても、ガヴァネスという職種は他の召使たちとは切り離された、特別のものであったのだ。

さらにもう一つ例を挙げてみると、紹介された小さな小学校の教師の仕事について、ジェインは“*compared with that of a governess in a rich house, it was independent; and the fear of servitude with strangers entered my soul like iron*” (312) と表現している。この台詞から、フェアファックス夫人やアデルの間で平穏で恵まれた生活を送っていたかに見えたジェインが実は、ガヴァネスを独立的でない仕事と見なし、見知らぬ人達の間で奉公しているように感じていたということが分かる。ジェインの“*I should not be called upon to quit my sanctum of the schoolroom;*” (145) という台詞からも分かるように、ガヴァネスは勉強部屋に比喩的にはあるが閉じ込められ、外の世界と遮断された存在であった。ジェインは召使の誰とも対等に話が出来ないことを感じ、不満に思っている。だからこそ彼女にとってロチェスターの相手をするのが一層の喜びであったのかもしれない。

ジェイン自身を感じるガヴァネス像だけでなく、周りからみたガヴァネス像がどのようなものであったかを考察するには、ロチェスターの客人がソーンフィールド邸を訪れる箇所が有効だろう。中でもイングラム母娘はガヴァネスに対する感情を非常に率直に言っているのけており、その言葉は当時の上流階級のガヴァネスに対する観念を象徴していると考えられるので、彼女等の台詞を中心に検討しよう。

ジェインが客人にお辞儀をした時の“one or two bent their heads in return, the others only stared at me” (150) という態度から理解されるように、上流階級の人々の殆どはガヴァネスを明らかに見下し、無視するかのような態度をとる。一人の紳士がジェインをシャレードに誘ってみようかと言い出すことはあってもそれが結局反対されているように、ガヴァネスが彼女らの仲間に入るのは許されないことなのである。話題がガヴァネスのことになると、イングラム母娘は露骨に嫌悪感を表し、手ひどく非難する。まずは一つの例として、イングラム嬢がガヴァネスたちを描写する言葉の一部を引用する。

“I have just one word to say of the whole tribe; they are a *nuisance*. . . The best fun was with Madame Joubert. Miss Wilson was a *poor sickly thing, lachrymose and low-spirited*: not worth the trouble of vanquishing, in short; and Mrs. Grey was *coarse and insensible*: no blow took effect on her. But poor Madame Joubert! I see her yet in her raging passion, when we had driven her to extremities. . .” (155, The Italics are mine.)

イングラム母娘は、ガヴァネスをこの他にも“detestable” “ridiculous” “incompetency” “caprice” (155) “dead-weights” (156) などの言葉で形容している。またイングラム男爵夫人はジェインを評して“in hers [her physiognomy] I see all the faults of her class” (155) と言っているが、それを受けたイングラム嬢がガヴァネスの属する中産階級の欠点として挙げたものは、再び先述の言葉の類である。なぜそれほどまでにガヴァネスが嫌われていたかを探ることは複雑な問題に発展しそうだが、そこにはやはり上流階級の側の階級意

識というものが関わってくるのではないかと思われる。彼女らにとっては、上流階級の家庭の領域にガヴァネスなどという中流階級の者が子供を教える立場として侵入してくるのが我慢ならないのである。同様に考察を進めると、女家庭教師と男家庭教師との恋愛に問題が及んだ時にイングラム嬢が“Dear Mamma... as soon as she got an inkling of the business, found out that it was of an immoral tendency.” (156) と言っているのは、ガヴァネスを通して下層階級の低俗な風習が伝わってくると当時の上流階級が懸念したものを表していると考えられる。また、イングラムはガヴァネスの“bad example”を“distractions and consequent neglect of duty on the part of the attached – mutual alliance and reliance; confidence thence resulting – insolence accompanying – mutiny and general blow-up” (156) というふうに掲げているが、ここに見られるのはガヴァネスにとってのタブーであり、雇い主が最も嫌がるものである。下位の者の統制が効かなくなるというのは上位の者にとっては恐るべき、そして憎むべき事態なのである。

このように、周りの目から見たガヴァネス、そしてジェイン自身の目から見たガヴァネスが共に映し出しているものは、ガヴァネスが抱える複雑な苦悩の姿である。ガヴァネスが他のどの職業とも異なるような苦境を経なければいけないのはなぜだろうか。これまでの考察から考えられる原因は、まず一つには中流階級出身でありながら働かねばならないというガヴァネスの身分にあり、もう一つにはその雇い主とも召使とも相容れないという立場にある。つまりガヴァネスの持つ不安定で両義的な特性がガヴァネスの孤独を生んでいるといえる。続いてそのようなガヴァネスの両義性とジェイン・エアという主人公との関連性について、さらに詳しく考察したいと思う。

2. ジェインの位置の両義性

ガヴァネスは本質的に両義的な側面を持った職業である。そのことを示すために、まずはガヴァネスの立場を社会的に考察してみることにしよう。当時少なからぬ中産階級の女性がガヴァネスとなったのだが、それはガヴァネ

スが当時の中産階級の性役割から逸脱することなく働くことのできる唯一の職業だったからである。ガヴァネスと他の中産階級の女性の仕事、例えば “jailors, plumbers, butchers, farmers, seedsmen, tailors, and saddlers... dress-making, millinery” (Poovey 126) を比べてみる時このことは明らかだろう。すなわちガヴァネスという職業は、Mary Poovey から引用すると以下のような性質を持つ：“private teaching was widely considered the most genteel, largely because the governess’s work was so similar to that of the female norm, the middle-class mother” (127)。しかし本当にガヴァネスの地位が中産階級に留まっていられるようなものであったかどうかは疑問である。なぜならいくらガヴァネスが品の良い仕事と言われても、中産階級の女性にとって「働く」ということ自体が品位を損ねることだったのである。またガヴァネスは雇用者からは召使と見なされ、子供を教えるだけでなく、召使のような仕事も押し付けられていたという実態がある。さらには給料も召使並みであった。このような雇用状態から見ると、ガヴァネスになることは下層階級に落とされるも同然だったのである。ガヴァネスの陥る両義性というものは、この階級性と実情とのずれから生じていると考えられる。

ガヴァネスの出身階級と実情との間の矛盾は様々な形で現れる。第一章で言及したように、ガヴァネスは他人の家の中でその家の誰の地位とも異なる、孤独な存在であった。雇用者とガヴァネスとの関係も複雑なものを孕んでいた。

職務からいってもガヴァネスは、レディの教育にあたるからには、彼女自身がレディでなければならない。その意味ではガヴァネスは雇用者と対等である。彼女と雇用者の間には、生まれ、振る舞い、教育の点でなんの違いもないのだ。〔中略〕当時のレディの理念からいえば、レディは「報酬を受ける仕事」とは無関係の存在であり、生活のために働くガヴァネスはその観点からはレディとは見なし難いのである。つまり、ガヴァネスは雇用者と対等ではないのだ。(川本 48)

19世紀にはガヴァネスは上流階級だけでなく中産階級の家庭でも雇われてい

たため、ガヴァネスとその雇用者との差異は紙一重であり、財産の有無の差異のみとなっていた。ガヴァネスは窮乏のために中産階級からはじきだされた犠牲者であったといえるのである。また当然ながら、ガヴァネスは下層階級に入り込むことはできない。しかも召使たちから、ガヴァネスは「明らかに彼らの上位ではあるものの、雇い主やその友人たちからは対等に扱われていない」(川本 48) ため、軽蔑の念を持って見られてさえいたようである。ゆえにガヴァネスは中産階級にも下層階級にも共に属することのできない立場、つまり中産階級／下層階級の境界に位置していると定義される。

ジェイン・エアが孤児であることと彼女がガヴァネスになることとの間には明らかに相関関係がある。ジェインは両親の死後叔母の家に引き取られた居候であり、しかもその家族から愛されずに孤立した存在であった。ジェインは他の子供たちとははっきりと隔てられる。ジェインの立場については召使のアボットの言葉に明らかである。“you are less than a servant, for you do nothing for your keep.” (9) そしてジョン・リードがジェインの“master”なのである。この支配／従属関係は、ジェインがジョンに反抗した時の“like any other rebel slave” (9) という表現からも窺うことができる。財産と血縁の欠如、そして非力であることがここでのジェインの「召使以下」という立場を決定している。中産階級の家庭にありながら、そこに存在を認められていないジェインもまたガヴァネスの運命と同様に中産階級／下層階級の境界を彷徨う身分だといえるのではないだろうか。

ジェイン自身が“I was a discord in Gateshead Hall; I was like nobody there” (12) と回想しているように、彼女の人生のスタートは立場がないばかりか、存在すら危ういものであった。その境遇は幼いジェインを苦しめ、赤い部屋へと通じるトラウマを生み出す。ジェインはその境遇から抜け出したいは思うが、“I should not like to belong to poor people” (20) と下の階級へ落ちることを拒否し、また上の階級へ登る手段もないため、身動きが取れないのである。結局ジェインは、女子寄宿学校への入学という形でその不安定な辛い立場から抜け出している。

孤児として中産階級にも下層階級にも属せなかったジェインは、ローウッド学院で学問を身につけた後ガヴァネスの職に就くが、それによって再び中産階級／下層階級の境界を彷徨うことになる。Poovey が指摘しているように、ソーンフィールドを覆っているものは階級的、性的不安定という問題である(136-37)。孤児という境遇に加えて階級的不安定を表すガヴァネスという職業に身を投じたことによって、そこには一層強く両義性を持ったジェインが存在している。それは彼女の人生に宿命のように付きまとうのである。

それに対して Jina Politi は、ジェインがソーンフィールドに来てガヴァネスとなった時にはもはや境界の位置には属していないという立場に立つ。Politi は十一章からの語りの形式がそれまでの現実世界からファンタジーの世界に入ってしまう、ジェインの階級的境界性はそれまでの“I”と“narrator”という主体の分裂と共に、消え失せていると主張している。

After the tenth chapter what the writing is striving to do is to silence, efface, inscribe its narrative past. The ‘between narrative modes’ is perhaps a reflection of the ‘between classes’ in which Jane is caught. (88)

だが、ジェインの境界性がソーンフィールドまでに解決してしまっているならば、ジェインは主人であるロチェスターに対して頑に反抗したり、平等を宣言したりするだろうか。そのような行為は階級的に安定したファンタジーの世界では不必要なものである。以下の分析より、筆者はこの点の見解については Politi の意見に賛同しない。

『ジェイン・エア』という小説の特徴として注目すべきことは、ジェインが中産階級／下層階級の境界に位置する身分において禁じられたことをやっけてのけているという事実である。孤児であり、ガヴァネスであるジェインが禁じられていること、それは反抗と自己主張である。ゲーツヘッドにおいても、ソーンフィールドにおいても、ジェインはそれぞれの時点の主人に向かって主張せずにはいられない。まずジェインの反抗は、ゲーツヘッド荘での“master”であるジョン・リードへの非難で始まる。“You are like a murderer

—you are like a slave driver—you are like the Roman emperors!” (8) そしてジェインはジョンの不当な暴力に反撃する。これは追い詰められた奴隷の反抗を思わせる箇所である。そして一度反抗すると、両者の主人／奴隷の力関係は変化し始め、ついには「奴隷」の方が勝利を収めさえする。年齢、体格、ゲーツヘッド荘での身分、これら全てにおいてジョンに劣るジェインが勝利することの意味は大きかったと思われる。それはジェインがその後、自分より優位に立つ相手に向かう時の勝負の結果の予兆とも考えられる。

ジョン・リードへの勝利から間もないリード夫人への反抗も同様に、不当な支配に対する強者への反抗である。そしてそれはジェインの様な身分の者にとってはさらに危険を伴っていた。しかしジェインは自らのプライドのために反抗せざるをえなかった。その時に彼女が放つ “You think I have no feelings, and that I can do without one bit of love or kindness; but I cannot live so.” (31) という主張は、後にロチェスターに対しても繰り返されるのである。

“Do you think I am an automaton? — a machine without feelings? and can bear to have my morsel of bread snatched from my lips, and my drop of living water dashed from my cup? Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? You think wrong! — I have as much soul as you, — and full as much heart!” (222)

ガヴァネスとしてのジェインは当初は比較的従順であるが、この台詞を皮切りとして明確な自己主張を始める。これに続いて、ついにジェインは主人／召使の枠を越えて魂の平等をロチェスターに宣言するのである。さらにジェインは一般的な結婚の形、すなわち妻が夫に養われ、夫がその代わりに妻に無償の家事労働を要求するという形ではなく、有償労働の雇用契約に基づいた結婚を掲げているが、これはロチェスターがジェインを情婦のセリーヌのように扱うことに対する反抗であろう。そしてジェインの最大の反抗であり自己主張であるものは、苦渋に満ちたロチェスターとの別れの決断である。ジェインはロチェスターとの関係において、ガヴァネスが主人に対して持つ

ことの許されない主導権を持ったのである。

このような支配／従属関係を揺るがせかねないガヴァネスの反抗や主張は支配側の上流階級が無意識に恐れ、ガヴァネスへの悪感情の一因となっているものであると思われる。中産階級／下層階級の境界上の存在は、どちらにも属せないのと同時に、どちらにも作用を及ぼす可能性を持っているのである。そしてそれこそが、ガヴァネスという存在の両義性が導く結果であるといえる。ジェインが壊そうとしたものはあくまでも階級差や性差ではなく、ロチェスターの提示する結婚の像と、階級差または性差によって生じた精神的不平等であった。しかしその行動は、当時の小説の一般的なヒロイン像、また女性像の観念を打ち砕き、新しいタイプの女性を創り出している。境界上に属するがゆえに既成の階級的秩序からはみ出した存在であるガヴァネスと、「女性らしい」とされる定義からはみ出したジェインというヒロインとは、世間にとって同じ不安材料を抱えた存在なのである。ゆえにジェインはガヴァネスとして生きる時、二重の危険性を孕んだ人物だといえるのではないだろうか。

ガヴァネスとジェインの両義的な位置づけはこれまでの物語の軸となり、物語を生成する機能を果たしている。その後、ジェインはガヴァネスという職業、そして今までの孤児という状態からも解放されることになるが、それではジェインの両義的位置は物語の結末において解決されることになるのかどうか、次に検討していくことにしたい。

3. 主体化されたセクシュアリティ

これまで見てきたように、孤児でガヴァネスであったジェインは反抗と自己主張を携えて自らの両義的な位置を生きてきた。そしてその位置を離れる時はいつでも、ジェインが何らかの決断を迫られる時である。ゲーツヘッド荘からローウッド学院に移る時ジェインは、“school would be a complete change: it implied a long journey, an entire separation from Gateshead, an entrance into a new life” (21) と考えている。実際ローウッド学院への変化

は生活環境の悪化をもたらしたが、良い出会いによって孤児のジェインの孤独を鎮めてくれるものであった。ソーンフィールドを離れる時の決断は、もっと深刻である。幸福と安定をもたらすその地を去った先には何の当てもなく、中産階級／下層階級の境界から下層階級の底まで落ちることは必至である。しかし孤児で孤独なガヴァネスという境遇こそがジェインをソーンフィールドの先へと導いたのである：“The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself” (279)。身分を落としてまでもジェインがソーンフィールドを去ることを選んだのは、留まってロチェスターと共に暮らしたならば、法と道義を犯し、ロチェスターの情婦のような存在になってしまうからである。ロチェスターが情婦を奴隷と並べて劣等だと言い放っている (274) ように、情婦になることは下層階級への墮落に等しいものであった。ゆえにジェインが中産階級／下層階級の境界に位置するガヴァネスの地位を離れた時、墮落は不可避のものだったのである。

『ジェイン・エア』には「墮落した女性」の二つの例が見られる。一つは狂女となったバーサの例、もう一つはロチェスターの情婦セリーヌの例である。Poovey はガヴァネスの “‘low-born, ignorant, and vulgar’ women of the working class” (128) という一方のイメージから、ガヴァネスがバーサやセリーヌに連想される、精神病者や売春婦などに関連性があると指摘している (130-31)。しかしその理由からだけでなく、ジェインはバーサやセリーヌの立場と紙一重だといえる。それはジェインにも十分に彼女らと同様の運命を辿る危険性があったからである。ジェインは自分がロチェスターにとって「イギリス人のセリーヌ」になることを恐れる。“I will attire my Jane in satin and lace, and she shall have roses in her hair; and I will cover the head I love best with a priceless veil.” (227) というロチェスターの言葉は、かつて彼がセリーヌに貢いだ時の様子を思い起こさせる。この時ロチェスターは意図的でないにしろ、ジェインを彼の情婦にしようとしていたのである。ジェインがソーンフィールドを去ることを選ぶ時に自らに禁じた情婦の姿とは、セリーヌの姿に他ならない。

バーサとジェインとの関連についてはもっと複雑なものがある。その検討にあたって、まずは Sandra M. Gilbert の考察を参考にしたい。

The imprisoned Bertha, running “backwards and forwards” on all fours, for instance, recalls not only Jane the governess, whose sole relief from mental pain was to pace “backwards and forwards” in the third story, but also that “bad animal” who was ten-year-old Jane, imprisoned in the red-room, howling and mad... Bertha’s fiendish madness recalls... Jane’s own estimate of her mental state... And most dramatic of all, Bertha’s incendiary tendencies recall Jane’s early flaming rages at Lowood and at Gateshead as well as that “ridge of lighted heath” which she herself saw as emblemizing her mind in its rebellion against her position in society. (172)

このようにバーサはジェインと表裏一体の存在として捉えることが可能である。つまりジェインは狂気を通して常にバーサに変わる危険性を持つのである。バーサの狂気を Adrienne Rich が考察するように、“her physical strength and her violent will – both unacceptable qualities in the nineteenth-century female, raised to the nth degree and embodied in a monster” (150) と考えるとすれば、反抗と自己主張という「十九世紀の女性にあってはならない特質」を持つ主人公であるジェインは、同じく「怪物」にされてしまうのではないだろうか。もしもジェインが激しい狂気をロチェスターの前に現したならば、ロチェスターはジェインをバーサのように閉じ込めてしまうだろう²。

ジェインはしかしセリーヌやバーサのように情婦や狂女といった運命を辿らなかった。ジェインと彼女らを異ならせたのは理性の存在である。理性はソーンフィールドを去る時にジェインの判断の導き手となり、墮落の運命から彼女を救っている。そしてジェインは孤児やガヴァネスという寄るべなき身の宿命であるように自分の人生を他者に委ねるのではなく、自分自身のものとして所有し、決定する。それこそがジェインの獲得した自立なのである。このようにしてセリーヌやバーサのような精神上の墮落を受けるより、身分上の墮落を選んでソーンフィールドを離れたジェインの選択は、結果的には

ローウッド学院同様、彼女に良い変化を与えてくれる。ジェインは一度は乞食同然まで堕ちてしまったものの、そこを助けてくれたセント・ジョンとメアリー、ダイアナ姉妹と共に暮らすことになり、そこでジェインはガヴァネスの身分に続いて、いとこの存在が発覚したことによって孤児の状態から解放される。生涯孤独のジェインの身分は、マーシュ・エンドにおいて終わりを告げたといえる。

だが『ジェイン・エア』という小説の結末には、さらなる展開が用意されている。それが一度断念されたロチェスターとの結婚である。だからといってこの結婚は、マーシュ・エンドからソーンフィールドへの逆戻りの展開では全くない。ジェインが再び中産階級／下層階級の境界の状態に戻るということはないのである。それではソーンフィールドで示されたロチェスターとの結婚と、結末のファーンディーンでの結婚とはどのように変化しているのだろうか。二つの結婚の形はその状況において全く異なる。まずジェインが叔父の遺産によって自活できる収入を得たこと、それに対してロチェスターが右目の視力と右腕を失い、支えなしに生きるのが困難になったという立場の変化が挙げられるだろう。しかしジェインの自立の獲得という観点からこの結婚を考える時に最も重要な意味があるのは、より精神的な事実、つまりジェインが自らのセクシュアリティの主体となって男性を選んだということ、すなわちジェインのセクシュアリティにおける自治権の獲得である。

これまでのロチェスターとの恋愛においては、ジェインはロチェスターのセクシュアリティの圧倒的な支配の中に巻き込まれていた。ロチェスターはバーサを妻に持ち、かつてはセリーヌを始めとする数々の情婦を持ち、結果としてセリーヌの私生児の面倒を見ているという、ジェインよりずっと経験豊かな年長の男性であり、“‘guilty’ sexual knowledge” (Gilbert 168) を持つ人物である。ロチェスターの “I claim only such superiority as must result from twenty years’ difference in age and a century’s advance in experience.” (117) という言葉もそのことを暗示しているのではないだろうか。ジェインとロチェスターにはセクシュアリティに関して明らかに不平等が生じており、

それが二人の支配／被支配関係にも影響を及ぼしているのである。それはジェインがそのままソーンフィールドに留まっていたならば変わりようのない絶対的な支配である。性的不平等が存在する限り、フェアファックス夫人が憂慮するように、主人であるロチェスターが召使のガヴァネスを誘惑しているという図式ができてしまい、またジェインは限りなくロチェスターの情婦に近い存在となってしまうのである。しかしロチェスターの元から逃げ出して後に自ら彼を選ぶことによって、ようやくジェインはロチェスターと対等のセクシュアリティを得ることができたのである。

ジェインが自らのセクシュアリティの主体となったことにより、ロチェスターとの結婚の形は変わったのである。二人の結婚生活では身体を不自由にしたロチェスターの世話に従事するジェインは、もはやガヴァネスが中産階級の母親「のような」仕事をしているのとは異なり、完全に中産階級の規範としての母親「の」仕事をしている。これまで中産階級／下層階級の境界にいたジェインは、ロチェスターと結婚したことによって中産ブルジョア階級に取り込まれたように見える。確かに、ジェインがソーンフィールドでロチェスターの情婦となっていれば、経済的独立を奪われ、精神的にも支配されて完全に中産階級に取り込まれた結婚になっていたであろう。しかし、経済的独立を既に得、精神的独立を達成したジェインにとってそれはもはや当てはまらない。ファーンディーンでの結婚は女性の経済的、精神的両面の独立が保たれているという点で、中産階級に属しながらも全く異なる面を持っているのである。

ジェインがロチェスターと結婚して一日中彼の世話をしていることは、以前には支配／従属関係を踏襲しているようにしか見えなかったかもしれないが、ジェインが自らの意志でそれを選んだ時、そこに支配／従属関係は見られない。Terry Eagleton がジェインとロチェスターの結婚について、“the subservience is also, of course, a kind of leadership. . . . Whether she likes it or not . . . Jane finally comes to have power over Rochester.” (168) という見解を示しているように、ともすると逆転しかねない二人の力関係がそこには存

在する。これは「主人」に対するゲーツヘッドでの奴隷状態、ソーンフィールドでの召使、はては情婦といった状態とは明らかに異なる。自立を保った結婚というゴールに向けて、ジェインは最終的に成功し目的を叶えたのであり、それはこれまでの孤児やガヴァネスの階級的境界性が持つ力の作用の結果であるといえる。そしてジェインは結婚において中産階級に入りながらも、この境界性の持つ力を未だ保持しているのではないだろうか。

ジェインとロチェスターの結婚生活の中には孤児のジェインも、それが抱える孤独も、また不安を抱いたガヴァネスの姿も見られない。結婚して中産階級の一婦人になるという平凡な道に収まったかのような結末の中には、孤児でガヴァネスであったからこそ勝ち得た、魂の平等と独立を持った堂々たる一人の女性の姿が見られるのである。

Notes

1. 社会的問題提起という点から見ると、女子寄宿学校の実態を描き出し、その改善を世に問うたローウッド学院のくだりの方が当てはまる。それによって世間一般に女子寄宿学校の悲惨な状況が広く知られることとなり、結果的に待遇の改善がもたらされた。
2. バーサの過剰なセクシュアリティについてバーサの視点から描いたものとしては、Jean Rhys, *Wide Sargasso Sea* を参照。

Works Cited

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre: an Authoritative Text, Backgrounds, Criticism*. 2nd ed. Ed. Richard J. Dunn. New York: W. W. Norton, 1987. (Norton Critical Edition)
- Eagleton, Terry. "Class, Power and Charlotte Brontë" *Critical Essays on Charlotte Brontë*. Ed. Barbara Timm Gates. Boston: G. K. Hall, 1990. 50-59.
- Gilbert, Sandra M. "Plain Jane's Progress." *Critical Essays on Charlotte Brontë*. 156-180.
- Politi, Jina. "Jane Eyre Classified." *Literature and History* 8:1. Ed. Heather Glen. London: Macmillan, 1997. 78-91.
- Poovey, Mary. *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*. Chicago: U of Chicago P, 1988.
- Rhys, Jean. *Wide Sargasso Sea*.
- Rich, Adrienne. "Jane Eyre: The Temptations of a Motherless Woman." *Critical Essays on Charlotte Brontë*. 142-55.
- J.P. ブラウン 松村昌家訳 『十九世紀イギリスの小説と社会事情』 東京：英宝社，1987.
- 川本静子『ガヴァネス（女家庭教師）』 東京：中央公論社，1994. (中公新書)